



KENYA

ぼくたち大塚っ子・日本人・地球人

中山富美子

広島県広島市立大塚小学校

◆実践教科 総合的な学習

◆時間数 32時間

◆対象学年 6年生全

◆対象人数 152人

カリキュラム

■実践の目的

- ・ケニアの諸問題から、世界の抱える問題（貧困・識字・飢餓・エイズなど）について知る。
- ・世界の人たちと共に生きていくために、自分たちでできることを考える。

■授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1～3時間 世界のことや世界の様々な問題について知ろう	・ビデオ「世界の12才」を見て貧困・労働・戦争・民族と子どもたちについて知る ・「100人の村」の活動を通して世界には様々な言葉がある事を知ったり、それぞれの大陸の人口や世界の男女比から見えてくる世界の問題について考えたりする	・ビデオ「世界の12才」（ユニセフ）
4～5時間 識字について考えよう	・「100人の村」の活動や「一枚のお札から」「字を覚えて夕焼けが美しい」の文章から、世界には文字の読めない人たちがいることを知り、文字がわかることのすばらしさや文字が読めない事による不便さを体験したり感じたりする	・100人の村の活動「字が読めないということ」 ・資料「小学校に入学した子どもが卒業できる割合」（世界子ども白書） ・資料「一枚のお札から」 ・資料「字を覚えて夕焼けが美しい」 ・ワークシート
6～9時間 富の不平等について考えよう	・「100人の村」の活動、「世界の富は誰がもっているの」を通して、世界の富が先進国に集中し、開発途上国では多くの人口で少ない富を分配しなければならない事を知り、富の配分の不公平を体験する ・貿易によって経済格差が生まれていることを貿易ゲームを通して理解する	・100人の村の活動「世界の富は誰がもっているの」 ・小学生版「貿易ゲーム」（開発教育協会）
10～14時間 飢餓について考えよう	・ハンガーマップやビデオから世界の「飢餓」の実態を知り、飢餓の問題は自分たちと深く関係している問題であり、自分たちにも責任があることを理解する。そして、自分たちの食生活を見つめ直すきっかけとする ・田村治朗氏（国際飢餓対策機構）の話聞き、具体的な飢餓の実態を知る	・ハンガーマップ（WFP） ・ビデオ「世界の子どもたち」「隣の人の叫び」（国際飢餓対策機構） ・学校の残菜の写真 ・資料「世界と地球の困った現実」（国際飢餓対策機構） ・あなたの「地球家族度」チェックプリント（国際飢餓対策機構） ・ワークシート ・資料「エコ買い」

ここが素晴らしい！

世界の子どもたちが抱える問題からスタートし、世界の諸問題を考えさせる機会を作り、最後に支援について考え、残菜ゼロキャンペーンにつながった。子どもたち自身が下級生に広げたことはすばらしい力になります。

- ・世界の抱える問題は、自分たちの生活と関わり合っていて、自分たちにも責任があることを理解する。
- ・世界の問題を考えることを通して、自分自身の生活や生き方を振り返る。

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
15～16時間 貧困のサイクルをた ちきるために	<ul style="list-style-type: none"> ・ どうしたら貧困のサイクルをたちきることができるかを考え、貧しい国に対して現在されている支援（政府開発援助やユニセフの世界寺子屋運動、WFP世界食糧計画の学校給食キャンペーン）について知る。 ・ ノーベル平和賞受賞の「ムハマド・ユヌス」の活動をビデオ「未来への教室」を見て知る 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ユニセフポスター ・ WFP学校給食キャンペーンの新聞広告 ・ ビデオ「ムハマド・ユヌス未来への教室」
17～25時間 支援について考えよ う	<ul style="list-style-type: none"> ・ ケニア人の青年ティモを迎えて、ケニアの文化や生活に触れたり、ケニアに対する関心をもったりする ・ 仮定の村「ジャンボ村」の生活の改善策を、少年海外協力隊の立場で考えて、班で発表する ・ ケニアでの写真や体験を伝えたりビデオを見たりして、実際に行われている支援や青年海外協力隊の人たちの活動を知る ・ 青年海外協力隊員として、ケニアで活動していた方の話を聞く ・ JICAホームページ「ぼくら地球調査隊」を見る 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ゲストティーチャー（ケニア人青年） ・ ケニア写真フォトランゲージ（パワーポイント） ・ ビデオ「舞台はアフリカ青春賛歌」（JICA） ・ ゲストティーチャー（JICA出前講座） ・ ワークシート ・ JICAホームページ
26～32時間（3学期 予定） 自分たちでできること を考えて実行しよう	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本校の「給食週間」にあわせて、「給食残菜キャンペーン」を行い、全校に世界の実態を知らせたり、残菜を減らすように呼びかけたりする 	

授業の詳細

1～3
時限目

世界のことや世界のいろいろな問題について知ろう

自分たちの住んでいる豊かな日本が当たり前と
思っている子どもたち。そんな子どもたちに同じ
12才の子どもたちが抱えている貧困・労働・戦
争・民族の問題をビデオ「世界の12才」で知らせ
た。そして、世界の概要をとらえるためにまず
100人の村の活動「世界の言葉でこんにちは」「男
性と女性どちらが多い」「大陸ごとに分かれてみ
よう」の3つを行った。

4～5
時限目

識字について考えよう

学校に来て、教育を受けて、字が読めることが
当たり前と思っている子どもたち。100人の村の
活動「字が読めること」を行った。ワークシート
で学校に通うことのできない子どもの数や非識字
者の数を提示した。子どもたちは、字の読めない
人たちが世界にはたくさんいるという事実そのも
のに驚いたようだった。また、字が読めないこと
が貧困のサイクルを作っていることや、様々な問
題や差別を生んでいることも理解した。また、外

国だけのことではなく、日本でも何らかの理由で
大人になってから識字学級に通っている人たちが
いることを知らせた。「字を覚えて夕焼けが美し
い」（学校教育を受けられず文字を知る機会を奪
われた女性が70歳になって書いた文章）を読むこ
とで、字が読めることの素晴らしさを感じることが
できた。

児童の感想

- ・ 私たちと同じ年齢で戦争をしたり学校にも
行かず仕事をしたりする子どもたち。大人
になっても読み書き計算ができず収入が得
られない。どこかで打ち切ってしまうとい
ふと、総合で学習した貧困のサイクルがどん
どん回ってしまいます。打ち切るために日
本などの国が協力していきたいです。
- ・ 字が読めなかったり書けなかったりすると
私は不安になります。今、字が読み書きで
きるからそんなことがいえるんだろうけ
ど。世界の中に読み書きができない人がい
るなんて考えられません。そんな自分なん
てうそのようです。今、字が書いて字が読
めて本当に幸せなんだなあと思います。

6~9
時限目

富の不平等について考えよう

世界の多くの人たちが、自分たちのように豊かで不自由のない生活をしていると思っている子どもたち。100人の村の活動「世界の富は誰がもっているの」を行った。子どもたちは、コップの中のあまりにも違うジュースの量に驚いた。豊かな国の児童の中には「自分たちだけがこんなに多いのは申し訳ない」と感じたり、中には貧しい国の児童に自分のジュースをわけたりする子どももいた。「同じ地球に生まれて、どうしてこんなに豊かさに差があるのだろうか。」と自然に子どもたちのの中から疑問がわいてきた。

そこで、次の「貿易ゲーム」を行った。このゲームの中で、様々な出来事が起こった。仕事をしたくても道具がないために製品を作ることができない多くの貧しいグループ。一方で原料をどんどん買って製品を作り富をたやすく増やしていくひと握りの豊かなグループ。そんな中で、豊かなグループから資源と交換で道具を借りたり、時間制限のルールを作ったり、お互いの自然な助け合いの姿が見られた。また、貧しいグループ同士のもめ事も起こったりした。いずれも現実の世界の縮図を見るようだった。

子どもたちは、貿易ゲームを通して、富が富を生み、貧しさが貧しさを生む現実と世界の富の不平等を実感し、それに対して憤りを感じていた。

児童の感想

- ・私たちはCグループだったので「設備」「技術」「高い製品」がじゅうぶんにそろっていませんでした。その3つがそろっているのといないのでは全然違うんだとわかりました。Aの人がお金持ちの国ということでみんながそこに集まっていました。でもAの人も無理せず交渉していたのでとても良いなと思います。何事も争わずに話し合うことが大切だとわかりました。そういうことを楽しく学べてよかったです。
- ・貧しい国がどんな状況なのかが実際に体験してみてもわかりました。どんなに紙を写してもきれいにできるものが少ないしはさみがないから切り取ることもできなかったのが大変でした。このゲームをして貧しい国がなんで貧しくて、豊かな国がなんで豊かなのがわかりました。



世界貿易ゲーム（ただ今、交渉中）

10~14
時限目

飢餓について考えよう

「おいしくない。きらい。」子どもたちから日常的に給食時に聞かれる言葉である。食べ物を捨てることになんの罪悪感を持たない子どもたち。そんな子どもたちに、世界の飢餓の実態を知らせたかった。そして、その実態が自分たちの生活と深く関係しており自分たちにも責任のあることを理解させるために、世界食糧計画（WFP）のハンガーマップや日本国際飢餓対策機構「世界と地球の困った現実」の資料を使ったり、田村氏をゲストティーチャーに迎えてお話を聞いたりした。

ビデオ「世界の子どもたち」「隣の人の叫び」を見た。フィリピンの子どもたちの生活・バングラデシュで痙攣を起こし死んでいく赤ちゃん、干ばつのエチオピアで小石を口にしている子どもの映像などは、子どもたちにとって大変衝撃的なものだったようだ。

最後に、栄養士の先生にお願いして取ってもらっていた、本校の給食残菜の写真を提示した。自分たちの食生活を振り返るために大変有効だった。学習をした日に、「学習資料を家の人と読み、話し合う」という宿題を出した。

児童の感想

- ・今日、お母さんと総合の学習について話しあいました。お母さんは「日本の食生活は開発途上国の犠牲の上に成り立っている。」「海外の人の環境や生活を守るために、食料自給率を上げるためにも私たちは贅沢な食生活を見直す必要がある。」と言っていました。ほくも「そうだなあ。」と思いました。
- ・日本に輸入品が来なくなったら、日本はどうなるのだろうと思います。今、私たちは

何不自由ない生活をしているけど、もしかしたら明日から給食が出ないことになるかも知れません。みんなに今の現実を知ってほしいです。

15~16 時限目 貧困のサイクルを たちきるために

実際に行われている支援を学習するために、ユニセフ・WFP・ODAなどに加えて、今年ノーベル平和賞を受賞した「ムハマド・ユヌス氏」と「グラミン銀行」を取り上げた。ちょうど、ユヌス氏が広島市を訪問した時期と重なっていたのでニュース等でユヌス氏を知っている子どもたちもいて大変タイムリーだった。ビデオ「未来への教室」では、女性の自立を助けるユヌス氏の活動がわかりやすく取り上げられていた。グラミン銀行からの融資でかごを作り、その売り上げで生活を向上させている女性の姿は、「支援イコール自立を助ける」という具体的な姿であり、後のケニアでの学習とつながるものになった。

17~25 時限目 支援について考えよう

ケニアを例に取り、今まで学習してきたことをふまえて、どんな支援ができるかを考えることにした。

まず、ケニアに親しみ関心を持たせるためにケニア人の青年ティモを迎えて「ジャンボ・ケニアの会」を計画した。ちょうど4年生の国語教材で「ボレボレ」というケニアから来た少年の話があったので4年生6年生合同、計350人の会になった。

ジャンボ・ケニアの会

1. ティモの紹介
2. 歌「ジャンボジャンボ」
3. ケニア紹介
4. ケニアクイズ
5. ティモの「びっくり日本コーナー」
6. ティモのメッセージ
7. 質問コーナー



ジャンボ・ケニアの会

ケニアの概要や日本とのつながり・文化の違いなどを歌やクイズ、私が今回の海外研修で得たケニアの写真や資料などを使って紹介した。最後の「ティモのメッセージ」は子どもたちにとって印象深いものになった。彼の夢を語ってくれたあと子どもたちに向かって「お母さんの言うことを聞きなさい。先生の言うことを聞きなさい。」と力強く話してくれた。日本人が子どもたちに語らなくなったこの言葉を、ケニア人の彼が自信を持って子どもたちに語った。新鮮な感動が子どもたちにも、そしてその場にいる教職員にも伝わっていたような気がする。

次に、仮定の村「ジャンボ村」を設定して、少年海外協力隊になって自立に向けた支援を子どもたちに考えさせた。「ジャンボ村」の設定の中に私自身がケニアで出会った子どもやケニア社会の問題点などを盛り込んだ。

ジャンボ村の設定

少年ジョン・・おばあさんとお姉さんの3人暮らし



遠く離れた学校に通う
おばあさんの手伝いをする
木彫りの技術がある
(私がケニアで購入した木彫りの人形を提示)

少女マリー・・遠くはなれた病院に妹を連れてきている



父親がエイズでなくなる
サイザル麻でかごやざるを作る技術がある

ジャンボ村の抱える問題点

- ・遠い学校
- ・貧困

- ・電気がない
- ・少ない病院
- ・エイズ
- ・児童労働
- ・森林破壊



<子どもたちが考えた支援>

- ・木彫りをたくさん作り、たくさん買ってもらう。
- ・木彫りを売る店を作る。
- ・ジョンが木彫りの技術をみんなに広めることができるようにする。
- ・学校を近くに作ったり、先生を養成したりする。
- ・給食用の野菜を栽培する学校農園を作る。
- ・1年だけお金を支援して、村人が自分でお金を稼げるようにする。
- ・募金活動で病院を建てたり、医療器具を送ったりする。
- ・日本人がケニアに行き、病気の人を助ける。
- ・村人に常備薬を渡す。
- ・植林をする。太陽光発電機を設置する。など



どんな支援ができるだろうか
(ブレンストーミング)



少年協力隊プロジェクト案作成



プロジェクト案

これらの活動の最後に、子どもたちの考えた支援が、実際に行われている支援に大変近いことを伝えた。私がケニアで見てきた支援や支援に携わっている青年海外協力隊員やNGOの人たちの活動を紹介した。また、JICAの出前講座では、ケニアで理科教師として仕事をされていた方に、ケニアの中学生の様子や具体的な活動についてお話を聞くことができた。

26~32
時限目

自分たちでできることを考えて実行しよう

世界の問題を考える事を通して、自分自身の生活を見直し、できることから行動していくためにこの学習に取り組んできた。子どもたちの感想の中に「食べ物を大切にしたい、募金をしたい。」という意見が多かった。

本校では、ちょうど1月の末に「給食週間」がある。栄養士の先生と相談して、残菜を減らす「残菜ゼロキャンペーン」をさせてもらうことにした。6年生全員が数人ごとの班に分かれて全クラスを訪問し、今まで学習した世界の実態と本校の給食の様子を伝えて、食べ物の大切さをみんなで考えるきっかけにしたい。

成果と課題

ここ数年、子どもたちの「荒れ」の状態を間近で見ながら、飢餓や貧困や戦争のない豊かな国、日本にいながら「なぜ、子どもたちは??」という思いをいつも抱いてきた。子どもたちに「幸せ」について考えさせたかった。そのためには、自分たちが置かれている状況を、世界的な視野から知らせることが必要だと考えてこの学習に取り組んだ。

「字が読めないこと」「富の不平等」「飢餓」などこの学習で取り上げたどの内容も、子どもたちにとっては驚きであり、ショッキングな事実だったようだ。そして、子どもたちは世界の実態を知るにつれ、途方もなく恵まれている自分たちの環境にも気がついてきた。「ぼくたちがこんな生活をしていることが申し訳ない」と多くの子どもたちが感じていた。給食の残菜も「飢餓」の学習をしてからは、ほとんど出なくなった。さらに、「何か自分たちでもできることをしたい。」という意見も聞かれ、3学期の取り組みにつながってい

る。

また、子どもたちにとって遠い存在であったアフリカ・ケニアもゲストティーチャーや私自身が持ち帰った資料や写真などで大変身近に感じる事ができたようだった。「先生、ケニアの人って手のひらは白いんだねえ。」新鮮な感想だった。アフリカを考えることは世界の問題に向き合うことであると思う。子どもたちが頭の片隅にでも「アフリカ」を記憶してくれていれば、将来「アフリカ」に出会ったときに、小さな支援のきっかけになるかもしれない。

懇談会の時にある保護者から「総合の学習をしてから、今まで全く関心を持っていなかったのに、世界の問題を扱った番組を熱心に見るようになりました。」と言う話を聞いた。とてもうれしい言葉だった。

今後、子どもたち自身が生活の中の問題点に気づき、学んだことを日常生活のなかで行動につなげてくれたらと思う。そのためには、私自身が常に世界の問題にアンテナを広げ、関心を持ち続けていかななくてはいけないと感じている。